ストーリー 解説

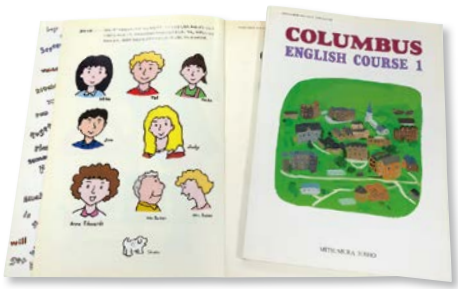
光村図書のストーリーが、英語の学びにいい理由

太田 洋（おおた ひろし）
東京家政大学教授

「Here We Come! 中学校英語出張ゼミナール」でも、ストーリーを取り上げました。ぜひご覧ください。

約30年続く、ストーリーの教科書

光村図書が英語教科書を初めて発行したのは、今から約30年前。私も創刊当初から関わっていますが、当初から、等身大の中学生の主人公と、魅力的なストーリーに引き込まれ、ワクワクしながら学ぶことができるのが特長の教科書でした。とても自然でリアルな英語、そして、中学生にとって身近な場面・題材を大切にしながら編集していました。



平成5年度版中学校英語教科書

では、なぜ変わらずにストーリーを大切にしているのでしょうか。そこには、「子どもたちが楽しく学ぶことができる」だけでなく、英語の学びにとっていい理由があり、効果的に力をつけていくことができるからです。ここでは、3つのことをお伝えしたいと思います。

英語の学びにいい理由

1. 目的・場面・状況に合った自然な英語

ストーリーの利点は、なんと言っても英語による発話の目的や場面、状況がしっかりと設定できることです。例えば、現行の学習指導要領から中学校で扱われることになった「仮定法過去」は「現実でない願望を表す」とよく説明されます。ですが、生徒には何のことだかわかりません。右下の場面とせりふならどうでしょう。

まさに「こうだったらいいのに」という二人の気持ちがよくわかります。キャラクターになりきってこのせりふを言ってみると、より理解できるのではないかと思います。

仲良しのTinaとのお別れの場面
Eriのせりふ

2. 自然にインプットの量が増える

光村図書のストーリーは、得意なこともあれば苦手なこともあるリアルな中学生が成長する姿を描いています。「そうそう、わかる」「こういう友達、いるなあ」と共感し、「続きが知りたい」「もっと内容を理解したい」と何度も読んだり聞いたりします。自然とインプットの量が増えていき、英語の理解につながります。

3. アウトプット、発信につなげやすい

アウトプットの前提となるのは、2.の「豊富なインプット」です。何度もストーリーに触れることで、キャラクターが話したせりふが生徒自身の言葉になります。また、彼らへの共感が「自分ならどう言うか」という意識を生み、英語で発信するきっかけになります。

このように、ストーリーを通じた英語学習は、豊かなインプットとアウトプットにつながり、楽しく力がついていくのです。